

## 郵便家屋台帳からみた19世紀末のバンコク人口

——予備的考察——

坪内良博\*・石井米雄\*

### The Postal Roll of 1883 and the Population of Bangkok

——A Preliminary Report——

Yoshihiro TSUBOUCHI\* and Yoneo ISHII\*

The Bangkok Postal Roll published in 1883 may shed light on some features of the population of the city before the first census was taken. Items which might be analyzed are discussed in this report with some interim figures. The most important feature is the ethnic composition of the city in that period. According to our analysis of 16,565 household heads registered in the roll, 60.1% were Thais, 36.3% Chinese, and the remaining 3.6% others. The degree of segregation of Chinese within the city is shown. The process of their assimilation may be traced

through observation of the variation in addressed titles, types of residence, etc. Other potentially fruitful areas of study include the location of each housing cluster, the occupational structure by ethnic group and sex of the household heads, analysis of the types and ownership of the houses, and identification and analysis of patronship of household heads. In spite of qualitative defects, old registration materials of this kind should be fully utilized to recover lost information of the demographic situation in the near past.

#### I タイ国における郵便制度の成立と 家屋台帳の作成

本稿の目的は、近代的人口センサスが実施される以前のバンコク人口の性格を解明するために、郵便配達のために作成された家屋台帳（後述）の利用法を検討することである。まず最初に、ここで利用しようとする家屋台帳の成立のいきさつを述べよう。

タイ国における近代郵便制度の正式発足は、1883年8月4日の郵便電信局（Krom

Praisani-thōralēk）の新設の時とするのが定説であるが、その準備はすでに1880年ごろから始まっていたらしい。『郵便電信局の沿革と発展』[Saan Ditbut 1963]という資料によると、その端緒をつくったのは、チュラーロンコーン王（在位 1868-1910）の宮内官をつとめていたチャオムーン・サムーチャイラート（Chaomūn Samoechairāt, 1853-1891）が作成した郵便制度創設に関する建議書であったという。残念ながら、この建議書には日付が脱落しているので、作成の時期を確定することは困難だが、『宮廷行事日誌』（*Bantūkh phrarātchakaranīyatit Rāiwan*）の1880年9月27日の条に、サムーチャイラートが拝謁して郵便制度創設につき奏上したという記事が

\* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

みえていることから推定すると、建議書が執筆されたのはおそらくそれ以前であったと考えられる [ibid.: 9]。近代的郵便制度創設を決意したチュラーロンコーン王は、事業推進の責任者に、王弟チャオファー・パヌランシーサワーンウォン親王を任命した。ちなみに、同親王は郵便電信局創設と同時に初代長官に任じられた。

当時のタイ人は近代的郵便制度について全く知識をもっていなかったもので、一挙に事を進めることをせず、あくまでも漸進主義でのぞむこととし、まず、首都バンコク市域内から準備に着手した。郵便を配達するためには、まず家屋を正しく見分ける必要がある。そこで、バンコク市域内の各家屋の「家屋番号」(māilēk bān) を定め、これを各戸に表示させるとともに家屋台帳を作成し、これを整理して郵便配達夫の手引きとなる詳細な家屋名簿を作成することにした [ibid.: 13]。こうして印刷されたのが、『バンコク郵便局職員のための市内住民リスト(道路および水路)第1部～第3部』(1883)<sup>1)</sup>である。筆者らのひとはバンコクの国立図書館においてこれを披見する機会に恵まれ、マイクロフィルムに収めて日本にもたらすことができた。序文によるとこの台帳は、1883年4月8日、すなわち郵便電信局が正式に発足する約4カ月前に発行されたことが分かる。

この家屋台帳には、家屋群ごとに、各戸主について、(1)家屋番号、(2)姓名、(3)官職名あるいは職業、(4)各自が所属するムーン・ナーイ(主人)の名、および父または母の名、(5)家屋の形状などが記されており、19世紀末のバンコク住民の居住状況を知る上にきわめて有用な材料が含まれている。3部からなるこの台帳は、第1部と第3部との間に若干の重複部分を含んでいるので、その利用は重複部

分を除いて行わねばならない。われわれの入手した家屋台帳が完全なセットであって、欠落のないものであるかどうかについては現在のところ十分な保証はない。しかし、家屋群の配列がタイ語のアルファベット順になっており、それぞれ最後の文字まで完結していること、および、判明する限りでは、これらの家屋群が王城内を除く全市域に分布していることは、少なくともサンプルとしての使用の妥当性を示すといえる。

Sternstein は、Postal roll を用いて、1882年当時のバンコク人口を再現しようとしている [Sternstein 1979]。彼の用いた Postal roll がわれわれの家屋台帳とどのような関係にあるかは明らかではないが、時期および内容からすれば、同一のものである可能性が高い。彼は Postal roll によって、1882年の首都(Krung Thēp)人口は約169,300人であって、その内訳はタイ人136,000人、中国人27,000人、マレー人4,000人、インド人1,000人、他のアジア人1,000人、西洋人300人であったとする。また、バンコク市域内の人口は119,700人で、タイ人93,000人、中国人23,000人、マレー人1,800人、インド人700人、他のアジア人900人、西洋人300人からなっているという。家屋台帳には世帯構成に関する情報が記載されていないので、彼の推計が何を根拠にどのような積上げによってなされたかは全く不明である。彼の目標の一つは、しばしばバンコク人口の5割に及ぶといわれた中国人の割合を、過大評価であると断定することであったが、これに代るべく示された彼自身の見解にもやや行き過ぎがあるように思われる。われわれはここでわれわれ自身の手によって台帳記載事項を検討し、数えあげを試みよう。<sup>2)</sup>

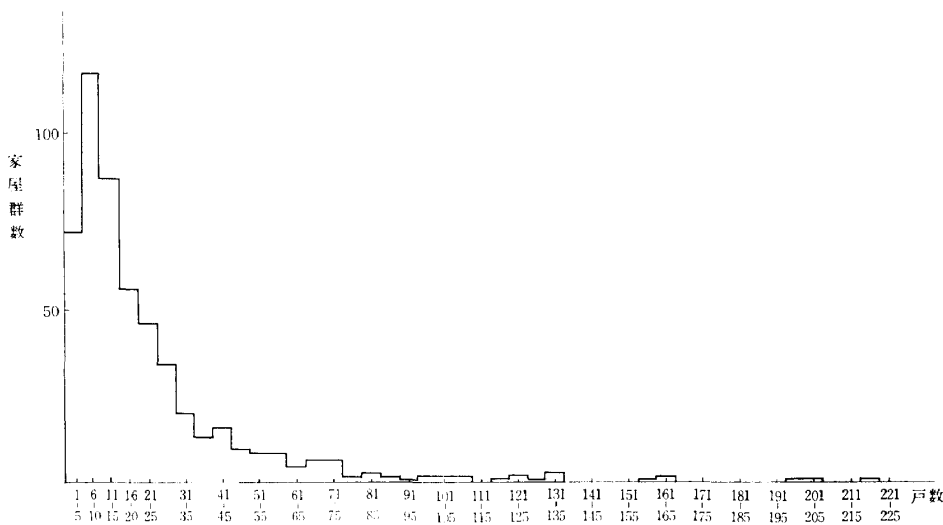
1) 文献〔タイ語〕Anonymous [1883] 参照。

2) ただし、中間報告としての性格上、本稿で示す数値は最終的なものではない。

に示しているといえよう。

## II 家屋群の規模

われわれが入手した家屋台帳には合計543の家屋群が記載されており、それぞれに対して、例えば「タパーンハン運河沿いの家屋群」、「ラーチャボピット寺院の長屋裏の家屋群」などの見出しがつけられている。すなわち、台帳作成者は何らかの外観上、地理上の目標からバンコクにおける家屋の地域別グルーピングを行なっている。一つの家屋群に含まれる戸数は、最も少ない場合は1戸のみ（3ケース）であり、最も多い場合には808戸に及ぶ。家屋群の戸数別に度数分布を観察すると、図1のごとくとなる。6～10戸から構成される場合が最も多く、分布は正規分布曲線を描かずに、右側に長く尾をひく片寄った形を示す。最頻値を含む10戸以下の家屋群に属する戸数は1,173戸で、全戸数17,540戸の6.7%を占めるに過ぎず、200戸以上からなる家屋群は9個しかないが、その内訳は、205, 220, 248, 263, 349, 401, 528, 530, 808（おのおの戸数を示す）、計3,552戸で、全戸数の20.3%を占めている。大小の家屋群の併存は、当時のバンコクの非組織性を如実



注) 戸数226戸以上の家屋群7ケースを除く。

図1 家屋群の戸数別分布

## III 異民族の割合

バンコクにおける中国人の割合がきわめて高かったことはよく知られている。19世紀中葉のバンコク総人口と中国人人口については、Skinner が各種の資料を整理してまとめ

表1 バンコク人口に関する記述

年次	中国人人口	総人口	出典
1822	31,000	50,000	Crawford [1830: II, 121, 215]
1826	60,700	134,090	Malloch [1852: 70]
1828	36,000	77,300	Tomlin [1844: 184]
1839	60,000	100,000	Malcom [1839: I, 139]
1843	70,000	350,000	Neale [1852: 29]
1849	81,000	160,154	Malloch [1852: 70]
1854	200,000	404,000	Pallegoix [1854: I, 60]
1855	200,000	300,000	Bowring [1857: I, 85, 394]

Skinner [1957: 81] による。なお、Tomlin の数値は原典のものを修正した結果が示されている。

ている（表1参照）。総人口の把握において、Pallegoix と Bowring とでは対象とする年次がほぼ同時期（1854年と1855年）であるにもかかわらず、前者は40万余、後者は30万余という数値を示すなど、きわめて大ざっぱな推定である。<sup>3)</sup>

3) Bowring は Pal-

中国人の数および割合については、彼らの存在が外見上目立ち易いために過大評価されている可能性がある。1904年に行われた首都を中心とする地域に関する最初のセンサス<sup>4)</sup>によると、バンコク市域および首都周辺地域の人口は、867,451人で、そのうち中国人は197,918人であった [Siam Observer Office 1910: 33]。このまま計算すると中国人の割合は22.8%であるが、中国人の割合はおそらく市街地において高く、1904年の統計は周辺の地域を含むため、<sup>5)</sup> またこの時期における中国人の定義に左右されるため、この場合は過小評価ということになるかもしれない。

郵便配達のための家屋台帳は、1883年における状況を推測するのに有用と思われる。これによると、空家あるいは居住目的以外の建物（寺院、舟小屋などを含む）を除いた家屋数は16,565戸であって、戸主の姓名に付された敬称を手がかりに民族識別を行うと、このうちタイ人は9,958戸（60.1%）、中国人は6,013戸（36.3%）を占めている。残りの594戸（3.6%）はマレー人や白人などである。中国人の割合は、19世紀中葉に推定されているよりもやや低いだが、1904年の数値よりも高い。このことは中国人の割合がバンコクにおいて次第に低下していく過程を示すとも受け

legoix の数値を明らかに過大とみているが、他方、彼自身も正確な知識をもたぬまま、印象によって本書の数値を示したことを明記している [Bowring 1857: 394]。

- 4) ちなみに、全国に関する最初のセンサスは、1909年になってはじめて行われた。
- 5) 1904年のセンサスによると、バンコク市街に居住する人口628,675人に対して、首都周辺地域 (provinces in the Krung Thēp monthon) の人口は238,776人である。民族別構成は両者を合わせた首都全体についてのみ記されている。市街における性比1.519に対して、周辺地域の性比が0.838であることは、これらの二つの地域の人口構造が非常に異なることを示しており、また市街地における中国人の多さをも示唆している (*The Siam Directory* [Siam Observer Office 1910] 記載の数値による)。

取られるが、それは、(1)中国人やタイ人の家屋がそれぞれ同民族の住人からなり、(2)1軒あたりほぼ同数の居住者を有すること、(3)バンコク都市域の拡張によってタイ人の多い地域が統計に含まれていくこと、などの仮定ないし条件下においてである。

Sternstein の示す中国人の割合は、首都 (Krung Thēp) 人口に関して15.9%、彼の定義するバンコク市域に関して19.2%である。用いた資料が同一ならば、この数値は各戸主に属する世帯員数に関して、タイ人と中国人の場合とで異なった人数を想定すること、あるいは中国人の世帯に含まれる現地で結婚した妻や現地生まれの家族を中国人として扱わないこと<sup>6)</sup> によってのみ得られるように思われる。これはきわめて重大なことからであるが、彼はその基礎を全く示していない。タイ人家屋数と中国人家屋数との比については、彼は言及しておらず、この意味でも誤解を生じ易い表現をしている。

#### IV 民族的隔離

上述の民族分布が実際にどのような形で現われるかを検討しよう。タイ人戸主のみからなる家屋群は157あって、家屋群総数の28.9%を占める。このような単一民族から構成される家屋群に居住するタイ人戸主は1,932人で、タイ人戸主総数の19.4%にあたる。また、中国人戸主のみからなる家屋群は33あって、そこに住む中国人戸主は390人で、中国人戸主総数の6.5%にあたる。これらの数値は、タイ人、中国人ともに他民族を添加せぬ形で居住するケースが存在することは確かではあるが、他民族と混住する場合の方が多

- 6) Bowring [1857: 395] には、中国人の妻はシャム人、ペルー人、マレー人、カンボジア人、およびビルマ人であり、すべてタイ語を話すという記述がある。

いことを示している。他民族との混住の傾向は、タイ人よりも中国人において著しいといえる。マレー人についても同様の観察を行うことは、民族差を知るためにきわめて興味深い。現時点ではマレー人とその他の外国人との分離区分が全家屋群については未完なので、ここで言及することができない。

単一民族から構成される家屋群の平均戸数は、空家および居住目的以外の建物を含めて、タイ人戸主のみの家屋群については12.6戸、中国人戸主のみの家屋群については12.4戸である。これらの数値は全家屋群の平均戸数32.3よりもかなり小さく、家屋群が大きくなると混住の可能性が増大することを示唆しているが、このことが統計的な蓋然性の幅の中で出現するのか、あるいはより以上の意味を有するかについては、家屋群の規模と地域性との関連などを含む厳密な検討を必要とする。

ここで、タイ人と中国人の隔離と混住をとりあげて図示を試みよう(図2)。各家屋群のタイ人戸主と中国人戸主に注目し、これら二者の合計において中国人戸主の割合の高いものから順に配列し、中国人家屋総数を100とした場合の中国人家屋の累積を横軸に、それに応じたタイ人家屋の累積(タイ人家屋総数を100とする)を縦軸に示す。aはタイ人戸主をまじえない家屋群に居住する中国人戸主の全中国人戸主に対する割合、bは中国人戸主をまじえない家屋群に居住するタイ人戸主のタイ人戸主総数に対する割合を示すが、いずれも既述の傾向に対応している。累積曲線は混住にさまざまな程度があることを示している。曲線の形は多数のタイ人の中に少数の中国人が混入する場合よりは、多数の中国人の中に少数のタイ人が混入している場合の方が多いいことを示す。これが何を意味するかは、各家屋群の内部構造を精査してさぐられねばならないが、一群の借家を所有するタイ

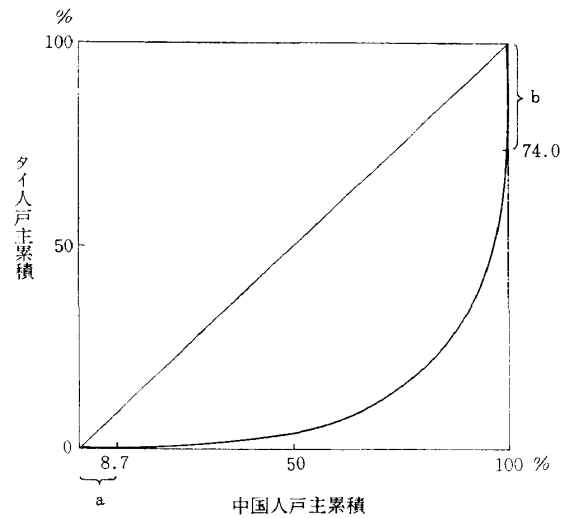


図2 家屋群単位に観察した中国人とタイ人の混住状況

人家主の存在がこの現象と何らかの関係を有するかもしれない。

上述の観察方法は1950年代あるいはそれ以前から、米国の社会学者によって、黒人と白人の居住に関する隔離(segregation)の程度を測定するために、都市域内のセンサス調査区(census tract)を単位として適用されてきたものである。グラフのさまざまな部分に着目して隔離程度の指標化がはかられているが、それらはいずれも単一インデックスとしては不十分なものであるとされる[Duncan & Duncan 1955]。本稿においては、上述の欠陥に加えて、観察単位とした家屋群の中に規模の小さいものを含むため、単一民族から構成されるグループが出現し易くなり隔離の程度が誇張される一方、大規模の家屋群内における民族凝集状況が見逃される可能性がある。しかし、この種のグラフからは、他との比較をまっけて、いくらか有用な結論を得ることができる場合がある。相互比較が興味ある結論を導くとすれば、実数は少ないが、マレー人に関する観察を加えて、タイ人とマレー人、中国人とマレー人の混住状況を観察することが可能である。しかし、この作業は前述の理由のために、次のステップとして残さ

表2 タイ人だけの家屋群と中国人との混住家屋群における王族・貴族および女性の有無

混住状況	タイ人中の 特定要素	王族・ 貴族を 含む	王族・ 貴族を 含まず	Amdeeng を含む	Amdeeng を含まず	計
タイ人だけの家屋群		65 (41.4)	92 (58.6)	125 (79.6)	32 (20.4)	157 (100%)
中国人を含む混住家屋群		143 (43.3)	187 (56.7)	283 (85.8)	47 (14.2)	330 (100%)

れている。

### V タイ人中の特定要素と中国人居住とのかわり

タイ人に関しては、戸主が王族あるいは貴族に対して与えられる何らかのタイトルを有する場合は1,020ケース（タイ人戸主総数の10.2%）あり、また、戸主に女性に対する敬称（Amdeeng）が付されている場合が2,933ケース（29.5%）ある。これらの王族・貴族的身分の戸主や女性戸主が、中国人との混住に際して親和的な役割を果たしているか、あるいは排他的な関係を示しているかについて見直しをつけておきたい。

タイ人戸主のみからなる家屋群、タイ人戸主と中国人戸主とを含む混住家屋群のそれぞれにおいて、王族・貴族的身分と判定されるタイ人戸主を含む家屋群とこれらを含まぬ家屋群とを区別し、また女性戸主を含む家屋群と含まぬ家屋群とを区別して、これらの割合を示すと表2のようになる。タイ人だけの家屋群においては、王族・貴族タイトルを有する戸主を含むケースが中国人を含む混住家屋群に比してやや低いですが、その差は僅少であり、王族・貴族と中国人居住との間には特に顕著な関係はないといえる。このことは、上下いずれの方向にせよ、中国人が差別的な扱いを受けていないことを示唆するが、より厳密な結論は、王族・貴族の地域的分布、市域

中心部と周辺部の差などを考慮して出されねばならない。女性戸主を含む家屋群の割合は、タイ人だけの家屋群よりも中国人を含む混住家屋群においてやや高いといえる。

上述の傾向は、それぞれのカテゴリーの家屋群の大きさの差に影響されて現われているのかもしれない。これを検討する一つの方法として、それぞれのカテゴリーのタイ人戸主総数に対する王族・貴族戸主総数と女性戸主総数の割合を調べると表3のごとくとなる。王族・貴族の割合に関しては、前述と同様の傾向が維持されている。<sup>7)</sup> Amdeeng を付されている女性戸主の中には、父の名から明らかに中国人の娘と知られる者が含まれているので、タイ人に対する比は厳密にはこれらを差し引いた上で計算されねばならない。このこと自体には厳密な検討が必要であるが、このような手続きを経たのちもなお、混住家屋群における女性戸主の割合は、タイ人だけの家屋群におけるよりもやや多くなるのではないかと思われる。女性

表3 タイ人だけの家屋群と中国人との混住家屋群における王族・貴族およびAmdeeng数と、そのタイ人戸主に対する割合

	タイ人戸 主 (%)	王族・貴 族戸主 (%)	Amdeeng 戸主 (%)
タイ人だけの 家屋群	1,932 (100)	175 (9.1)	514 (26.6)
中国人を含む 混住家屋群	7,569 (100)	817 (10.8)	2,309 (30.5)

7) 王族または貴族のタイトルを有するのはタイ人であるという仮定に基づいているが、この仮定自体については厳密な検討を必要とするかもしれない。

戸主の一部が中国人と結婚している可能性をも念頭において, 女性戸主の存在形態を各家屋群内で綿密に検討してみる必要がある。他方, 女性戸主の出現一般については, 各種の商売を含む職業従事との関連をさぐることも重要である。

## VI 家屋配列順の観察

すでに述べたように, 家屋台帳では各家屋群を単位として, それぞれの家屋に対して一連の番号が付されている。市域内における家屋配置が線状になっているという保証はないが, 少なくとも近接原理によって番号が与えられていると考えることはできる。このことは各家屋群内部における民族的凝集の様相を検討する手がかりとなる。ここでは若干の事

例を示しながら見通しを述べよう。図3は民族所属を示しつつ各戸主を番号順に並べたものである。ここに示した5例は, タイ人の割合が多い順に提示されている。同一民族が隣接居住する傾向が若干認められそうであるが, いずれの場合においても, 各家屋群が民族によって明瞭に内部分化しているとはみられない。このことは, タイ人と中国人との混住を経て中国人の同化の過程が進むことを示唆している。規模の異なる家屋群の単純な民族構成比だけではなく, 確率論的な視点を導入した混住のインデックスを用いることによって, 混住の実態をより正確に把握評価することが可能である。

数量的な把握と同時に興味深いのは, 混住状況の中で, 中国人, マレー人などの外来民族が同化への道をどのように進み始めている

家屋群	10	20	30
No. 233			
{ 総戸数	75	TTtTTttTTTTCCCTttTTTtTTttTTTT	
{ タイ人戸数	70	tTTTTtTTttTTtCTttCTtTtTTttTTTT	
{ 中国人戸数	5	TtttTTTTTTttTttT	
No. 85			
{ 総戸数	50	TTtCTtTtTtCTCTttTTTTttTCTTCCtt	
{ タイ人戸数	33	CCCCCCCCCTttCTTtTTCT	
{ 中国人戸数	17		
No. 214			
{ 総戸数	31	CCTTtTtMTCCtCCtttTCtCtCtCCC	
{ タイ人戸数	17	C	
{ 中国人戸数	13		
No. 275			
{ 総戸数	62	TCTtCTCCCttTCCXXtTTCCTttTTttTT	
{ タイ人戸数	32	ttTTTTTTTTMtTCCOOOXOOOOXOCCCTC	
{ 中国人戸数	17	CC	
No. 251			
{ 総戸数	84	OTCCCTCCCCCtCCCCCtCCctCCCC	
{ タイ人戸数	16	CCCCCCCCCtCCCTCtTTttCTCctT	
{ 中国人戸数	66	TCCCCCCCCOCCCCCCCCCCCC	

T: タイ人(男), t: タイ人(女), ⊥: Amdeej を冠された中国人の娘, C: 中国人(男), M: マレー人, O: その他(白人を含む), X: 空屋または非居住用建築物

図3 家屋の配列例

かを個別的, 具体的に観察することである。例えば中国人については, (1)そのうちのごく一部ではあるが, タイ人と同様, 主人を有するようになっていて, (2)中国人の娘がタイ人女性と同様に, Amdeej の敬称を付されて記載されていること, などに注目すべきである。マレー人など

については、通常 Khæk あるいは To' と冠することによって識別されるものが、タイ人男子と同様、Naai という敬称を付される場合があることに注意すべきであろう。

## VII 今後の分析のためのその他の 問題点と可能性

### a. 家屋群の位置

台帳における家屋群の配列は、各家屋群に与えられた見出しのタイ文字配列順に従って行われており、バンコクの地理に通暁している郵便配達員にとっては有用な索引の役割を果たし得た。しかしながら、歳月の経過とバンコク市街の発展変容のために、今日では各家屋群の位置を推定することは、聴取を含む現地調査を行わぬ限り、かなり困難である。とはいっても、家屋群に付された寺院名や運河名などを手がかりとして、地域推定が可能な場合がある。中国人やその他の外国人の居住が多い地域は、よりのちの時代の統計などからある程度明らかであるが、ここで1883年当時の市域における民族分布の手がかりを得ることは、都市成立史の発展のために有用であろう。例えば中国人の居住に関して、排他的な居住地域がこの時点においてどこに形成されているかを見定め、これらがのちにいかに変化していくかを、新しい資料とつなぎ合わせながら観察することは、興味深い作業の一つとなるであろう。当時の排他的なタイ人居住地域に関しても同様である。地域推定は時間のかかる作業で、しかも不明部分がかなり残るものと考えられるが、地区特性をふまえた分析のためには不可欠である。

### b. 職業構成

家屋群の観察はその職業構成に関しても行い得る。職業記載はすべての戸主に対してなされているわけではなく、特にタイ人男子の

場合記載を欠くことが多い。このように断片的な職業記載ではあるが、家屋群の位置と関連せしめる時、当時のバンコク都市人口に関して興味深い事実が明らかになる。若干の可能性をあげれば、以下のごとくである。まず、バンコク周辺部をおおう農業地域の存在と、その相対的な大きさが問題となる。すなわち、家屋台帳の職業分類には、野菜栽培、キンマ栽培、水稻栽培、果樹栽培などを含む農業的職業が含まれており、さらに養豚を職業とする戸主もかなり多数見出される。これらの非都市的要素がわずかに17,540戸の台帳記載家屋の中に見出されることは、バンコクが単なる「都市」ないし「市街」ではなく、より複合的な要素をもつことを示唆している。バンコクにおける都市的部分と農業的部分に関する民族的構成、戸主の性別構成、貴族の居住状況などの観察は、この時点における都市の構造をより明らかにするであろう。各種の商売を営む者についても、居住地域と業種との組合せからバンコクの性格を示唆する事実が発見されるかもしれない。

### c. 家屋の形状および所有主

郵便配達のためには家屋を識別することが必要であるから、台帳には各戸の形状が記されており、石造、木造のみならず屋根、壁材料に至る区別が可能である。他の要素との組合せによって、市域の構成をよりよく理解することができる。特に民族との組合せは、この側面でも同化過程を示す手がかりを提供するかもしれない。往時のバンコクには水上家屋が多かったといわれるが、これらの分布、実際の数、居住者についてもある程度の資料が得られるであろう。このことは、外部からの印象として捉えられたバンコクの景観を、数量的な認識におきかえるために有用と思われる。

台帳を概観すると、借家を主体とする家屋



群がかなり多く存在することが分かる。借家に対しては、家主が明記されている。家主は中国人の場合もあり、タイ人（女性を含む）の場合もある。他方、借家人には中国人の名が多い。これらの借家群は当時のバンコクの開発地域に建設されたと思われるので、その分布を調べることはきわめて興味深い。借家群が民族的混住のフロンティアとなるのか、あるいは外来者を収容することを主目的として少なくとも一時的に隔離状況を生み出すのかも、合わせて検討されねばならない。

#### d. 所属の問題

個人がいかなる所属関係を有するかについては、台帳記載事項を手がかりとして観察可能な側面が若干ある。

1918年に「人頭税徴収法」が制定されるまで、タイ人の間では各人はムーン・ナーイに所属することが原則になっていたが、すでに述べたように、これらの主人の名は各タイ人戸主（女性の場合は除く）について記されている。概観すると、特定の主人に属する者は1カ所に居住しているわけではなく、むしろほとんどの場合分散居住している。主人の名前に同一名がないとすれば、同一主人に属する者の人数と居住地分布とをコンピューターを用いて検索することが可能であり、この作業が順調になされた場合には興味深い事実が発見されるであろう。

タイ人以外の住民、特にマレー人および一部の中国人に関しては、ヨーロッパ諸国の領事の保護民となっているケースが見出される。これらの保護民の数と地域分布についても把握が試みられねばならない。

厳密な意味では所属とはいえないが、台帳には戸主の父または母の名が記載されている。このことは同化の過程を知るために利用可能であるようにみえるが、情報は父母両方に関するものではなく、いずれか一方に限ら

れているので、その有用性は限定され、推測の介入を許さねばならない。記載方法として興味深い傾向の一つは、男性戸主については父の名を、女性戸主に対しては母の名を記載するケースが多いことである。このこと自体の意味は、整理された資料を基礎に考察されるべき問題である。

## VIII おわりに

本稿で扱ったのは、郵便配達のための家屋台帳の資料としての利用をめぐる可能性と見通しについてであって、最終的な結果ないし結論ではない。現在までに台帳記載のすべての家屋を対象に、17,540枚の家屋別カードの作成が完了し、各戸主について、タイ人、中国人、その他の民族への分類が行われ、このうちタイ人についてはさらに、王族・貴族のタイトルの有無、および男女の識別が行われた。他の項目については、翻訳およびコード化の作業が全カードの約3分の2まで進んだところである。今後コンピューターを用いた識別作業をも行うとすると、分析作業はその緒についたばかりである。この意味で筆者ら自身も本稿執筆は時期尚早と感じている。この種の作業は忍耐と根気を要するものであって、専断的な作業が行われていないとはいえ、現在すでに作業開始から10カ月ばかりを経過しており、中間報告がなされるべき時期には達しているのである。<sup>8)</sup>

19世紀末の家屋台帳を扱うことが、東南アジアの人口研究にとってどのような意味をもつかを、末尾ながら記しておきたい。東南ア

8) カード作成およびコード化を含む分析のための基礎作業は、大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科の網中賀子氏の手によって進行してきた。作業はその後同大学同学科の大橋靖子氏にひきつがれ、同大学同学科助教授吉川利治氏の協力の下に進行中である。ここに記して感謝の意を表する次第である。

ジアの都市は、多くの場合、この時期以後に急速に発達したのであって、中国人を主体とする異民族の流入と彼らの定住が都市発達の重要な側面を形成している。この意味で19世紀末のバンコクは、現在の東南アジア都市の萌芽的形態を具有する。それは土着の村落とは全く異質な様相を呈していたのである。このような都市の特徴は、特にバンコクに関しては、第2次大戦後の中国人移民の減少と同化の進行、さらには地方タイ人の大量移住によって、急激に失われていく。バンコクに関しては当初の異質の中においても、すでにこのような同化ないしタイ化への準備があったようである。このことは他の東南アジア都市と比較して重要な特徴となる。われわれが扱った時期の中国人がほとんど男子移民であったことは、通婚による同化を促進し、他方单身生活者についてはたえざる入国者と帰国者との交替を実現していた。この意味で往時の中国人移民は、中国婦人（特に既婚婦人）の流入がさかんになった1920年以降の様相とは異なっている [Skinner 1957: 196]。東南アジア都市の発達の歴史の短期性をふまえて、そこに導入された民族の土着社会に対する連続性と非連続性を見定めることはきわめて重要な作業である。この意味で19世紀末のバンコクは、単なる歴史上の存在ではなく、現在に直結する意義をもっている。

100年という期間は人口研究の観点からすれば比較的短いにもかかわらず、東南アジア、特にタイ国については数量的データを著しく欠いている。この時期の研究のためには、不完全データを用いる推計ないし、時には推量が不可欠となる。失われた近い過去を再現するために、さまざまな手法が考案されねばならない。不完全データはその多くの欠陥にもかかわらず最大限に利用されねばならないのである。

## 文 献

## 〔欧 文〕

- Bowring, Sir John. 1857. *The Kingdom and People of Siam, with a Narrative of the Mission to that Country in 1855*. 2 Vols. London: John W. Parker and Son. (Reprinted in 1969 by Oxford University Press)
- Crawford, John. 1830. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin-China*. 2nd Ed. London: Henry Colburn and Richard Bentley.
- Duncan, O. Dudley; and Duncan, Beverly. 1955. A Methodological Analysis of Segregation Indexes. *American Sociological Review* 20.
- Malcom, The Rev. Howard. 1839. *Travels in South-Eastern Asia, Embracing Hindustan, Malaya, Siam, and China, with Notices of Numerous Missionary Stations, and a Full Account of the Burman Empire*. 2 Vols. London: Charles Tilt.
- Malloch, D. E. 1852. *Siam, Some General Remarks on Its Productions*. Calcutta: Baptist Mission Press.
- Neale, Frederick Arthur. 1852. *Narrative of a Residence in Siam*. London: Office of the National Illustrated Library.
- Pallegoix, Mgr. 1854. *Description du Royaume Thai ou Siam*. 2 Vols. Paris. (Reprinted in 1969 by Gregg International Publishers Ltd.)
- Siam Observer Office. 1910. *The Siam Directory*.
- Skinner, G. William. 1957. *Chinese Society in Thailand: An Analytical History*. Ithaca: Cornell University Press.
- Sternstein, Larry. 1979. Krung Thep at One Hundred: Scape and Grid. *Journal of the Siam Society* 67(2).
- Tomlin, Jacob. 1844. *Missionary Journals and Letters, Written during Eleven Years Residence and Travels among the Chinese, Javanese, Khassians, and Other Eastern Nations*. London: J. Nisbet.

## 〔タイ語〕

- Anonymous. 1883. *Sārabanchī suan thī 1-3 khū rātsadon nai changwat, bān mū lae lamnām samrap chaophanakngan krom praisanī krung-thēpmahānakhon, tangtae chamnuan pī mamae benchasok chunlasakkarāt 1245*. Bangkok: Bradley Press (Rōngphim Ban Bradlē).
- Saan Ditbut. 1963. *Nangsū prawat lae wiatthana-kān krom praisanī-thōralēk*. Bangkok.